

別事 特記 ゼツファイレツリ時代を共に生きた人々(後)

取材・文 中東生
Text Shinobu Naka

先月号の前半に引き続き、演出家フランコ・ゼツファイレツリ(6月15日没)の追悼コメントの後半をお届けする。今日はゼツファイレツリと関係の深かった、欧州の音楽祭と歌劇場の総裁二人に登場いただいた。

チエチーリア・ガスティア
(アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭
総裁、ソプラノ歌手)

フランコ・ゼツファイレツリの遺作、ヴェルディ《椿姫》は、アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭史上初めて世界にライブ放映された。

「彼の死によって世界から注目されることになり、悲しい贈り物です」と複雑な気持ちをお吐露するのは、元ソプラノ歌手、現アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭総裁のチエチーリア・ガスティアだ。「私が初めてゼツファイレツリに会ったのは、1984年ヴェレンツェ歌劇場で、カルロス・クライバー指揮ゼツファイレツリ演出の《椿姫》に出演するため、彼の自宅を訪ねたときでした。それからずっと親交が続き、ローマ歌劇場でのレオンカヴァッロ《道化師》や、彼の当劇場デビューとなったビゼー《カルメン》でもミカエラに推してくれました。私が当歌劇場総裁として《椿姫》新演出が必要だと判断したとき、このオペラを愛していたゼツファイレツリに思いきって頼んでみると、すでにアイディアを書き留めてあったデッサン



アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭総裁のガスティア。同音楽祭では、ゼツファイレツリの遺作となった《椿姫》を上演して話題となった(次ページ参照) ©Ennevi

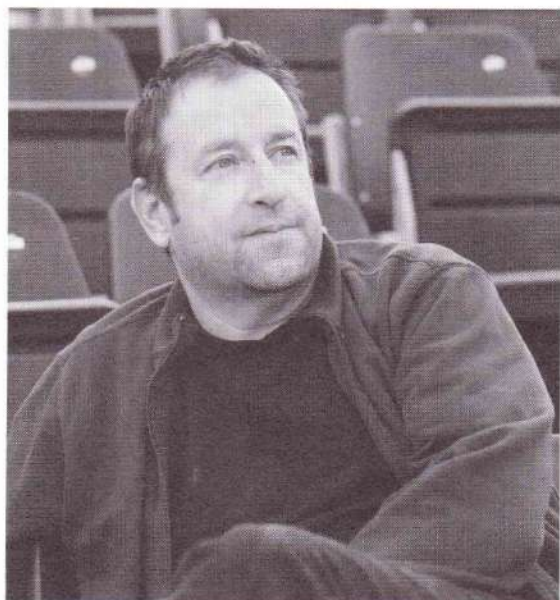
画を見せてくれたのです！この劇場に最愛の《椿姫》を遺すことは彼にとって重要なことだったのでしよう」

ガスティアは35年間協働したゼツファイレツリを「彼は縫物にいたるまですべてに才能があり、その上に努力家で、1日

20時間働いたこともあります。そうして準備を重ねても、納得いかない点があれば、最初からやり直すほどの完璧主義者でもありました。彼はイタリア・ルネサンスを継承する最後の人物でしょう」と端的に表した。

アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭のレパートリーのゼツファイレツリ演出は、前出のデビュー作《カルメン》の他、プッチーニ《トゥーランドット》、ヴェルディ

《アイダ》、プッチーニ《蝶々夫人》、ヴェルディ《トロヴァトーレ》、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》とあり、この《椿姫》と合わせて、7作のゼツファイレツリ演出はこれからも観客に愛され続けていくだろう。



「レジーテアターの国」ドイツのハンブルク州立歌劇場で総裁を務めるデルノンは演出家でもあり、ドイツでゼツファイレツリの死が大きく取り上げられなかったのに驚いたという ©Peter Schnetz

「彼の演出は洗練されていて上品で、オペラ界で特別な美学的価値を持っているにもかかわらず、ドイツではその死が大きく取り上げられなかったのは驚きました。彼は演出のみならず、舞台美術や衣裳も担えたため、美的完全主義を他の誰よりも貫いたので。そんな彼だからこそ保証できた『趣味の良さ』が、マリア・カラスなどのスター歌手たちを惹きつけたのでしょう。彼は《椿姫》やヴェルディ《オテ

ロ》を、まるで自分が書いた作品のように描き切り、些細な動きまですべて音楽に基づいた演出をしました。そんなゼツファイレツリとの偶然の出会いを夢見て、1980年代後半の夏、彼の別荘があるポ

ジヨルジュ・デルノン (ハンブルク州立歌劇場総裁、演出家)

ゼツファイレツリの祖国イタリア以外でもその遺産は受け継がれている。駆け出しの演出家だった頃にゼツファイレツリとの出会い、現在はハンブルク州立歌劇場総裁としてレジーテアターとの融和点を探るジヨルジュ・デルノンはこうまとめる。

「ジターノに通ってみました。すると、ある日カフェに座っていた彼を見つけたのです！ 思い切って話しかけると会話が始まり、ドイツ語圏でのオペラ演出についてたくさん質問されて、同時にいくつかの助言もくれました。それらを経た現在の自分は、例えば彼のモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》などを通して、彼の遺した『完全なる美』をドイツにも伝えていけたらと思います」